

てん ひと うえ ひと つく ひと した ひと つく い
天は人の上に人を造らず、人の下に人を造らずと云へり。され
てん ひと しょう ばんにん ばんにんみなおな くらい う
ば天より人を生ずるには、萬人は萬人皆同じ位にして、生
きせんじようげ さべつ ばんぶつ れい み こころ はたら
まれながら貴賤上下の差別なく、萬物の靈たる身と心との働
もつ てんち あいだ もの と もつ いしよくじゅう
きを以て、天地の間にあるよろづの物を資り、以て衣食住の
よう たつ じゅうじさい たがい ひと さまたげ おのおのあんらく
用を達し、自由自在、互に人の妨をなさずして、各安樂
よ わた たま しゆい
にこの世を渡らしめ給ふの趣意なり。

【大体の意味内容】。「天は人の上に人を造らず、人の下に人を造らず」という言葉がある。こ

れは、「天は人をこの世に生じさせるに当たっては、すべての人々は、みな同じレベルにあつて、身分の貴いとか賤しいとか、上とか下とかの差別をつけたりはしない。人間はこの世のあらゆるものの中でも、靈魂を持つているこの心身を以て学び、知恵を働かせて、天地の間にある世界のすべてのものを生かし、衣・食・住の必需品を整えるのだ。天はこうして、自由自在に人々を遊動させ、互いの生き方を妨げあうことなく、われわれがこの世を安らかに楽しむように、生かしてくださっている」という意味である。

この後続けて福沢は「現実には賢い人や愚か者、貧乏人や金持ち、などのちがいがあるのはなぜだろうか」と問っています。そして、寺子屋で教科書として扱われる『實語教』の一節「人學ばざれば智なし、智無き者は愚人なり」を引きます。つまり、天然自然の摂理に従っていれば、人々の間に貴賤上下の差別は生じないはずだが、実際には、人間は生きる経験から様々なことを学ぼうとする根源的な欲求を持っており、そうした学びの程度によって、賢者と愚者の差別が生じることを、指摘しています。このことから福沢は、我々が本来持っている学問欲を、おさえることなく発動させるべきことを説くのです。それはなにも難しい古文漢文を読んだり、詩歌をたしなんだりすることはかりでなく、実際の生活に役立つ「實学（じつがく）」を重視します。その例として、地理学、究理学（物理学）、歴史学、経済学、修身（しゅうしん）学。言葉は堅いけれど、身の周りのことについて知ろうということ、最後の「修身」とは自分の行いをより良いものに磨（みが）き上げ、心を込めて他人と交流することが、「天然の道理」すなわち宇宙本来の法則であるということです。